

## 「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈1月9日（金）放送分〉

### テーマ「奄美の民話や昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、毎月第2金曜日にお届けする、「奄美の民話や昔話」シリーズの第10回、大和村の昔話「破れ頭巾」です。

昔々、あるところに一人の青年が畑仕事をして暮らしていました。ある時、青年が畑で何を作っても、作物さくもつがよく育たないので、村外れにある、神様が奉まつつてある場所に行きました。青年には神様にお供えする花も何もありませんでしたが、何はともあれ、まずは神様をおおがいでみようとしました。そして、「神様、私には何もお供えするものがないので、私の体を差し上げます。」と神様に拝みました。するとその言葉を聞いていた神様が青年の前に現れ、「何もないお前は、自分の体を差し出そうとしているのか…。かわいそうに…。私はお前を助けてやらなければならない。」と言って、破れた頭巾を青年に与えました。そして、「この頭巾を被かぶれば、小鳥たちが何を言っているのかが分かる。お前が必要になったときにはこれを被りなさい。そうすればお前はしっかりと暮らしていけるようになるだろう。」と言って、消えてしまいました。青年は、「はい、神様。ありがとうございました。」と言って村に帰りました。

青年が家に帰ろうとして、村の入口まで来ると、二羽のカラスがガア、ガアと騒さわがしく鳴いていました。早速、青年は神様からもらった破れ頭巾を被ってみました。するとカラスたちが話しているのが分かりました。カラスたちは、「おい、島で何か妙なことなどを聞くことはないか。」「うん、やっぱり妙なことがあるよ。島の殿様の一人娘が死にそうな程の病気で寝込んでいるが、どの易者えきしやに見てもらっても原因が分からないんだ。」「ああ、それはあの家の表戸おもてとぐち口の隅すみにある門が原因だ。一匹の蛇へびが茅かやと一緒に屋根に葺ふかれていて、さらに茅葺きを押さえ付ける竹竿たけざおには釘くぎまで打ってある。だから蛇が屋根から出られなくなって苦しんでいるのだ。殿様の娘が死にそうな程に弱っているのは、どの易者もそのことを見当てることできないからだ。門の屋根にある茅葺きをきれいにして、閉じ込められている蛇を出してあげれば、娘は元に戻るが、蛇が死んでしまえば、娘の命も無くなるのだ。」「そうだったのか…。じゃあまた今度、話をしよう。」と言って別れて行きました。この話を聞いていた青年は、これはいい話を聞いたと思い、すぐに殿様の家に向かいました。

青年が殿様の家に来ると、家の前では人々が大大騒動おおそうどうをしていました。青年が話を聞いてみると、「殿様の一人娘が重病で、もう、今日か明日かの命だということで、こんな大騒動をしているのだ。」と言われました。青年は、「私は易者だ。私が行けば、娘さんの病気がすぐに治るのだが。」と言いました。殿様はその言葉を伝え聞いて、「何はともあれ、その青年をここに連れてきなさい。」と言い、青年は殿様のところに連れて行かれました。青年は、「どおれ、私が娘さんを見てあげましょう。う～ん、ああ、これは家の門にある屋根に蛇がくくりつけられているようだ。その蛇が

屋根から出ようにも出られずに苦しんでいるから、その蛇を出してあげなさい。そうすれば、娘さんの病気はすぐに治るだろう。」と言いました。そこで、殿様はすぐに門の屋根を調べさせると、本当にひよろひよろになった蛇が出てきました。そして、その蛇に水を飲ませたり、肉を食べさせたりして山へ帰してあげました。すると殿様の娘は、何事もなかったかのように元気になりました。青年は殿様からたくさんのお金と持ちきれないほどの宝物をもらって家に帰りました。

またある日、青年の家の近くでカラスたちが鳴いていたので、青年は破れ頭巾を被ってカラスたちの話を聞いてみました。すると、「島の大将が大変重い病気にかかっているが、それは楠くすの木の切り口の上に家を建てているからだ。楠の木の切り口から芽が出ようとしても出られず、楠の木の神様がそこに住もうとしても住めない。誰かよい易者が行って、楠の木を掘り起こして庭に植え替えるように教えれば、楠の木の神様も喜び、大将の病気も治るのだが…。それを見定めることができる易者がいないので、大将は今日か明日かの命になっているのだ。」と話していました。その話を聞いた青年は、すぐに村の大将の家に向かいました。青年が家に着くと、村の大将が今にも死にそうになっていると、人々が大騒動していました。青年が、「私が大将を治してあげましょう。」と言うと、「何とぞお願いします。」と大将のところに案内されました。青年は大将の顔を見ながら、「この家の床下ゆかしたを調べてみなさい。楠の木が床下しやまにあって、その切り口から新芽が出ようとしている。しかし、家が邪魔で芽が出せないでいる。家を動かして他の場所に移し、その楠さかの木を庭に植え替えなさい。そうすれば、大将の病気も治るし、この家はますます盛んになるだろう。」と言いました。大将は、「ああ、そうだったのか…。」と言って、青年の言う通りにすると、大将の病気は治り、その後、大将の家は大いに栄えました。

しばらくして、村の大将はお礼として青年が一生働かなくても暮らしていける程のお金が入った箱を与えました。不思議なことに、青年が神様からもらった破れ頭巾は、いつの間にか無くなっていたそうです。

さて皆さん、今回のお話しはどうでしたか。カラスに限らず、動物たちの言葉が分かればいいなあと感じることはありませんか。逆に考えると、動物たちは、人間の言葉が分かればいいなあと思っているのかも知れませんね。昔話で出てくる頭巾も、現代ではあまり使われなくなっていますが、「防災頭巾」などの形で残っているので、見たことがある人も多いと思います。何が流行りゆうこうするか分からない世の中なので、お洒落しゃれな頭巾が流行はやする時代が来るかも知れませんね。

このように奄美図書館には、郷土に伝わる昔話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、皆様のご来館を心よりお待ちしております。以上、鹿児島県立奄美図書館でした。